

金子みすゞの童謡詩における 色彩表現と仏教について

打出祥子

金子みすゞは大正の終わりから昭和の初めにかけて活躍した童謡詩人である。童謡詩人としての活動は約五年、そして二六年という短い生涯で五一二篇もの作品を残した。五一二篇の作品の多くは色彩が豊かで、色が入っている作品は五一二篇中二一四篇ある。

みすゞの色彩に関する先行研究は、野中咲紀子氏が「金子みすゞの色と心」（九州龍谷短期大学紀要）第五四号、平成二〇年三月）において、みすゞの全作品の色彩について、各色の占める割合を報告されている。また、上宇都ゆりほ氏は「金子みすゞと古典歌人——過去への視線——」（詩と詩論研究会編『金子みすゞ 詩と真実』勉強出版、平成二二年七月）

において、みすゞが自分を表す際に黒を使っていることを指摘されている。さらに近年では、槌賀七代氏（『金子みすゞを支えたもの——家族——』）と小林和子氏（『みすゞにみる母子家庭の母と娘』——いずれも、詩と詩論研究会編『金子みすゞ 母の心 子の心』勉強出版、平成二二年四月）の研究があり、白い寝巻と死との関係が報告されている。しかし、あまり研究が進んでいないのが実状である。

今回、作品解釈における色彩表現の重要性を、特に「色彩表現と宗教」という点に着目して明らかになったことの一端を報告したい。紙幅の制限もあるので簡単に報告する。

みすゞの作品で主に使われている色は赤・青・白・黒・金である。このなかで特に注目すべき色として黒と金が挙げられる。黒はマイナスイメージの色でもあり、自分自身を表す色ともなっている。金は夢やお伽の世界を表す色である。また、第二童謡集の終わりから第三童謡集にか

けては仏教の世界、死後の世界を表す色としても使われている。この二色には注目すべき変化がある。一つの作品に黒と金が入っているものは、第一童謡集にはなく、第二童謡集では四篇あるが、黒と金の世界は分けられている。しかし、第三童謡集では黒が金に変化したり、変化したいという願望が書かれている。黒（自分を表す色）から金（死後の世界を表す色）への変化は死への希求ともいえるのではないだろうか。

みすゞの三冊の童謡集はだいたいの書かれた順になつていようである。第二、第三童謡集の書かれた時期のみすゞは結婚をし長女を出産している。しかし、夫は創作に理解を示さなかつたため、みすゞにとつては不幸な結婚であつた。そして、みすゞは結婚・出産を期に童謡から遠ざかり、一番の理解者であつた弟正祐に「金子みすゞは私にとつて故人です」と言われている。このような私生活の変化が色彩にも影響を及ぼしたと考えられる。

特に注目すべき作品に第三童謡集の「向日葵」がある。「向日葵」は仏教思想と無関係のように見えるが、色彩に注目すると仏教との関わりが見えてくる。「向日葵」は作中の黄金を黄色と同系の色と見なすと、黄、青、白、黒、赤の五色が全五一二篇中唯一揃っている作品となる。五色は浄土信仰の臨終時において特に重要な色となつている。

みすゞの暮らしていた山口県長門市仙崎には青海島があり、同島の大日比には浄土宗の西圓寺がある。西圓寺は江戸時代中期から後期に大日比三師と呼ばれる法岸、法洲、法道の三人の住職がおり、熱心な布教をした。この西圓寺に伝わる、阿川文正編『大日比西円寺資料集成（往生伝之部）』（山喜房仏書林、昭和五六年三月）では臨終の際、聖衆来迎の瑞相として五色の雲が見られることが確認できる。また「向日葵」というタイトルも仏教的である。というのは、「ひまわり」は「日輪草」とも書き、「日輪」は「阿弥陀仏」を表すからである。「阿弥陀仏」を「日輪」と表す例は『大日比西円寺資料集成（往生伝之部）』と大日比三師の行

業記である『大日比三師傳』（大日比三師講説発刊所、明治四五年二月）でも確認できる。

みずゞの生活圏内の仙崎には青海島も含め、寺院が一一ある。そのうち浄土真宗が五寺院、浄土宗が四寺院あり、とても浄土信仰の厚い地域だといえる。また、西圓寺は世界で最初の日曜学校をはじめた寺院である。みずゞの居た時代、仙崎では他の寺院も日曜学校をやっており、みずゞは西圓寺や他の寺院の日曜学校に参加していたと考えられる。したがって、浄土信仰に基づく教えや往生伝を聞く機会もあつただろう。以上のような信仰環境も考慮すると、「向日葵」の五色の色彩表現と浄土思想の結びつきは益々深まることになろう。

（大学院文学研究科国文学専攻修士課程）